Bookstart Newsletter

ブックスタート・ニュースレター

2018 春 No.60

宮崎県小林市

第1特集

赤ちゃんに手渡す絵本

～選び方とその観点～

ブックスタートでは、絵本を介した心ふれあうひとときを家庭でいつでも持てるよう、親子に絵本を読み、手渡します。

どの自治体も、赤ちゃんと保護者のことを考え、思いを込めて絵本を選んでいますが、自治体ごとに異なる実施状況によって、選書の考え方も変わってきます。手渡す絵本の冊数は、1冊のところもあれば複数冊のところもあります。全員に同じタイトルを手渡す場合もあれば、数種類のタイトルから選んでもらう場合もあります。対象月齢や一人当たりのブックスタート・パックの予算額、事業を開始してからの年数などによっても違いが出てきます。

では、各自治体では、どのような過程を経て、手渡す絵本を決めているのでしょうか。3つの自治体の事例と、全国各地へのヒアリングで集まった、絵本を選ぶ際の様々な観点をご紹介します。

→次ページへ

第2特集 P6
どんな広報をしていますか?～各地のアイデア紹介～

CASE 01

宮崎県小林市 保育士や保護者も交えて「選書委員会」を組織

絵本を手渡すことへの思い

小林市では、ブックスタートを始める前にもボランティアが健診で読みきかせを行い、絵本で赤ちゃんとふれあえることを伝えていましたが、なかなか保護者に理解してもらえずにいました。ところが、2008年度に事業を開始し、5タイトルの選択肢から2冊の絵本をプレゼントするようになると、保護者がボランティアの話に熱心に耳を傾け、我が子のための絵本を嬉しそうに選ぶようになり、事業の手応えを感じたそうです。

ブックスタートは、保護者にとっても楽しいひとときです

図書館長の山下町子さんは、「赤ちゃんにとって、お父さんやお母さんに声をかけてもらうのは、心地よく嬉しいこと。そして『おむつ替えようね』といった日常の言葉かけ以外にも、絵本が身近にあれば、絵本の中の言葉でたくさん話しかけてあげられます。親子に絵本をプレゼントできることの意味はとても大きいと思います」と言います。

赤ちゃんと保護者が、いつでもあたたかい時間を過ごせるように、という思いが詰まった絵本。小林市には、そんな絵本を選ぶための委員会があります。

年に3回「選書委員会」を開催

ブックスタートは3か月児健診で実施しています。会場では、図書館員とボランティアが、保健センターと連携して親子に対応していますが、手渡す絵本は、保育士やブックスタートを経験した保護者も参加する「選書委員会」で選びます。図書館の蔵書に選書や廃棄の基準があるのと同様に、ブックスタートで手渡す絵本についても、誰が、どのように選んでいるのかを明らかにすることが必要ではないかとの考えから、事業の開始当初からこの体制がとられてきました。メンバー10名が年に3回集まり、絵本を選ぶほか、ブックスタート会場の見学や意見交換などを行っています。

◆選書委員会の構成

保育士・幼稚園教諭　3名
乳幼児の保護者　2名
ボランティア　2名
図書館員　3名

◆選書委員会の1年間の流れ

第1回（8月頃）：ブックスタート事業の説明（図書館から）／意見交換
第2回（11月頃）：ブックスタート会場の見学／絵本の選書／意見交換
第3回（1月頃）：1年間の振り返り／意見交換

選書の様子

◆選書の方法

委員が実際に絵本を手に取りながら進めます。候補の絵本を読み合い、読んでもらったときの感覚を味わうことも大切にしています。

選書の頻度：1年ごと
手渡す冊数：2冊
①絵本1冊1冊を手に取り、赤ちゃんに読むように読み合い、感想を共有。
②委員が手渡したい絵本に投票。
③投票結果を受けて意見を交わし、手渡す絵本を決定。

事業充実へ向けた委員会の役割

選書委員会は、ブックスタート事業をより良くしていくための組織としても位置付けられ、広報や保護者アンケートのやり方など、その時々に応じたテーマで意見交換を行います。

第2回の委員会ではブックスタート会場を見学。会場のあたたかな雰囲気を直に感じることは、選書の参考となるだけでなく、普段現場に出向くことのない委員を含め、全員がブックスタート事業をより主体的に考えることにもつながっています。例えば、現場を見た委員から、「窓ガラス越しに車の動きが見えると、赤ちゃんや保護者が気になってしまうのではないか」という意見が挙がり、窓の手前についたてを置くようになりました。また、「親子が疲れないように、健診終了後ではなく、待ち時間を有効活用してはどうか」といった提案があった際には、関係機関である図書館、社会教育課、健康推進課、子育て支援課が集まり、待ち時間に実施できるかを検討。医師の都合で実現にはいたらなかったものの、これまで以上に親子の状況に配慮しながら実施していこうという共通理解が得られました。

委員会という客観的に話し合える場を持つことで、小林市の活動はさらに充実しています。

選書委員会の皆さん

VOICE

小林市立図書館
朝稲 征子さん

様々な分野の人たちの関わりが活動を充実させる

選書委員会では、「ブックスタートで手渡す絵本が、赤ちゃんにとっての最初の絵本となるかもしれない」ということを意識しながら大切に選んでいます。保育園の先生から、園での読みきかせの様子を聞いたり、保護者の委員から、赤ちゃんには読みきかせはまだ早いと思っている保護者もいる、といった話を聞くことは、絵本を選ぶ際のヒントになります。また、男性の委員が、お父さんにも読みやすい絵本という観点で意見を出してくれたこともありました。

ブックスタートを受けた保護者のアンケートには、「本を自分で買う機会がなかったが、もらった絵本を読んでみたら子どもが興味を持った。これからたくさん読んであげたい」「絵本を通じて赤ちゃんとコミュニケーションが取れている気がする」といった感想が寄せられ、選んだ絵本が喜ばれていることを実感しています。

選書委員は、活動をより良くするための意見を挙げてくれますし、ボランティアさんも、普段の活動の中で気付いたことを教えてくれます。色々な立場の人から意見や情報をもらうことで、図書館員だけでは見過ごしてしまうことにも気付くことができ、課題が見えたり、新しいアイデアが生まれます。

今後も、委員やボランティアの皆さんとともに、活動を充実させていきたいです。

CASE 02

静岡県静岡市 ボランティアの意見を基に選ぶ

静岡市では、ブックスタートのボランティア全員が集まる研修会で、手渡したい絵本についての要望を訊き、その結果を基に図書館員が手渡す絵本を決定しています。

ボランティアは、絵本についての勉強を重ね、赤ちゃんへの読みきかせ活動を行うなど豊富な知識と経験を持っているほか、ブックスタートでの実践も積んでいます。そうした人たちの意見を大切にしているのです。

また、ブックスタート事業はボランティアの協力なくしては成り立たないことから、ボランティア自身が親子に読んであげたい、手渡したいと思う絵本を選んでいます。

◆選書の方法

選書の頻度：2年に1度
手渡す冊数：1冊
①きょうだいで重ならないよう、これまでに手渡したことがなく、さらに

予算の範囲で購入できるタイトルを候補として挙げる
②ボランティアの意見を参考にしながら、図書館員が、①を6タイトルに絞る
③研修会で、図書館員が、②の絵本をボランティアに向けて読む
④ボランティアが、ブックスタートで手渡したい1タイトルを投票
⑤市内全図書館の児童サービス担当者が集まる会議で④の集計結果を共有。得票数が最も多かったタイトルを手渡す絵本とする。その絵本を既に持っている場合の差し替え用に、2番目、3番目に得票数が多かった絵本を採用する

静岡市ブックスタートの様子
（写真提供：静岡市）

CASE 03 茨城県笠間市 図書館員が主体となって決める

笠間市では、図書館員が中心となり、おはなし会で赤ちゃんに読んだ経験や、各々の知識を持ち寄って、2冊の絵本を選んでいます。

手渡した絵本を家庭でできるだけ長く楽しんでもらうため、どんな組み合わせにするかについては特に検討を重ねます。例えば、1冊が実施月齢の頃に楽しめるものならば、もう1冊は少し大きくなっても楽しめるものにしたり、表紙の色味や見た目、絵の傾向、内容、絵本を開いた時の印象や読んでみた時の印象などを、一つ一つ確認しながら組み合わせを考えます。決定後は、ボランティアにそれぞれの絵本の特徴や楽しみ方などを共有し、手渡す際の参考にしてもらっています。

◆選書の方法

選書の頻度：1年ごと
手渡す冊数：2冊
①きょうだいで重ならないよう、これまでに手渡したことのないタイトルを候補として挙げる
②①の中から、市内3館の図書館ごとに、予算も考慮しながら2冊の組み合わせを提案
③3館の図書館員が集まる会議で、②で挙がった全タイトルの中から、最も手渡したい1タイトルを選ぶ。更に、組み合わせた時のバランスを考えながら、もう1タイトルを選ぶ

笠間市ブックスタートの様子
（写真提供：笠間市）

Others その他の自治体では こんな事例も

連携機関にヒアリングをしたり、保護者や一般市民の声を集めるなど、他にも様々な工夫をして手渡す絵本を選んでいる地域があります。

◆赤ちゃんに関わる機関に……
・保健師に、赤ちゃんの発達や親子の関係づくりの視点から意見を聞く。
・図書館員に、専門家の視点からの意見や赤ちゃん向け絵本の貸出状況を聞く。
・保育士に、園で赤ちゃんの反応がよい絵本について聞いたり、「ブックスタート赤ちゃん絵本」を貸し出して赤ちゃんに読んでもらい、反応を聞く。

◆保護者／一般市民に……
・子育て支援施設で、保護者に赤ちゃんが好きな絵本について聞き取りを行う。
・子育て支援関連イベントで、候補の絵本を展示し、来場者に意見を聞く。
・図書館に候補の絵本を展示し、来館者によるアンケート投票を行う。

◆近隣自治体に……
・ブックスタートを実施している近隣の自治体に、どの絵本をどのような理由で選んだかを聞く。

各地における絵本選択の観点 例

手渡す絵本をどのような観点で選ぶのかは、自治体によって異なります。その考え方は様々ですが、選んだ理由を明確にすることや、どのような思いを込めているのかを伝えられるようにしておくことが大切です。

2018・2019・2020年度
ブックスタート赤ちゃん絵本 ※

◆絵本の内容を第一に
・赤ちゃんと保護者がコミュニケーションを取りやすいもの
・ふれあいあそびや親子のスキンシップにつながりやすいもの
・対象月齢の赤ちゃんの反応を引き出しやすいもの
・赤ちゃんが成長しても楽しめるもの
・動物、食べ物、乗り物、生活など、赤ちゃんに身近なテーマのもの
・はっきりした色の絵や繰り返しの言葉、擬音語・擬態語、言葉のリズムが楽しいもの

◆赤ちゃんが支持するものを
・おはなし会で赤ちゃんの反応がよかったもの
・図書館での貸出数が多いもの
・長年にわたり読みつがれているもの

◆赤ちゃんが手にすることを考えて
・赤ちゃんが手に持ちやすい大きさ、重さのもの
・赤ちゃんが絵本を舐めても破れにくい、厚手の紙のもの
・赤ちゃんの手を傷つけないよう、角が丸いもの

◆読み手のことを考えて
・絵本を初めて読む保護者でも読みやすいもの
・お父さんも恥ずかしがらずに読めるもの
・きょうだいも一緒に楽しみやすいもの

◆複数冊を手渡す場合は
・テーマ、仕様などが異なるものを組み合わせる
・長年読み継がれているものと、比較的新しく出版されたものを組み合わせる
・ブックスタートを受ける月齢に楽しめるものと、もう少し大きくなってから楽しめるものを組み合わせる

◆保護者の状況に配慮するケースも
・典型的な家族像（両親の揃った家庭など）が想起されないもの
・母乳について悩んでいる保護者もいるかもしれないので、「おっぱい」などの表現が出てこないもの
・外国語を母語とする保護者も自由に言葉を添えて楽しめるよう、文字のないもの

◆数種類のタイトルから保護者が選ぶときに
・選ぶ楽しさが生まれるように、絵本のテーマや仕様が重ならないようにする
・価格の大きな差が出ないように、同じ価格帯でそろえる
・自治体の事業であるため、特定の出版社に偏らないようにする

◆絵本の保有状況を考慮して
・すでに持っている絵本と重ならないように、比較的新しく出版されたもの
・定評はあるが、実際に読んでみないと楽しさが伝わりにくく、保護者が選びそうにないもの
・きょうだいで重ならないように、過去に手渡したことのないもの
・同じタイトルを選ぶ場合は、年数をあける

※NPOブックスタートでは、各地のブックスタートで赤ちゃんに手渡される絵本の候補となる「ブックスタート赤ちゃん絵本」（30タイトル）を提供しています。絵本は、3年に一度開催される「絵本選考会議」で選出されます。赤ちゃんと絵本の関係について豊富な知識と経験を有する5名の委員（乳幼児発達の専門家、図書館司書、保育士など）が、選考基準に基づき、公平・中立的な立場で意見を交わし合い、選考を行っています。

第２特集

どんな広報をしていますか？
～各地のアイデア紹介～

広く市民に向けて広報することは、子どもに対する行政の姿勢を市民に伝える絶好の機会です。
また、理解者や協力者を増やすこと、そして事業継続の後押しにもなります。各地の広報の事例をご紹介します。

埼玉県三芳町

町の広報紙でくり返し紹介

町内全戸に配付される広報紙は、ブックスタートの対象者だけでなく町民全体に、また行政内にも事業を周知できる媒体です。
三芳町では切り口を変えて、機会があるたびに事業を PR しています。赤ちゃん、保護者、ボランティアの笑顔いっぱいの紙面は、毎回とても好評です。

＜これまでの掲載号＞

2009 年　2 月号	ブックスタート事業開始
2012 年 12 月号	フォローアップ事業開始
2013 年 10 月号	子どもたちへ本の魅力を伝える町ぐるみの活動を特集
2014 年 12 月号	子育て特集の中で、本を通じた取り組みを紹介
2016 年 12 月号	「よみ愛・読書のまち」を宣言した町の取り組みを紹介

▲「広報みよし」2016 年 12 月号
ブックスタートやフォローアップ事業、協力するボランティアの活躍ぶりなどが紹介されました。

Q 何度も掲載してもらうための工夫は？

A. 図書館：広報担当は「住民が主役」の紙面を作ろうと、町の旬な話題や魅力的な人を探しています。図書館からは、掲載してもらいたい情報があるときだけでなく、日ごろからこまめに行事を案内したり、写真撮影を依頼したりして、広報担当との関係づくりを心掛けています。
連絡はメールや電話ですることもありますが、直接顔をあわせて話すことは大切です。その際は必ず「笑顔」で。折にふれて連絡をすることで、関心を持ってもらうことにもつながります。
また、町民から図書館に届いた広報紙の感想は、広報担当へ必ずフィードバックしています。

北海道稚内市

10 周年を記念して保護者の感想文集を作成

10 周年を記念して、ブックスタートを受けた保護者を対象に感想文を募集。募集要項は新聞に掲載し、広く市民に呼びかけ、文集としてまとめました。さらに入賞者の表彰式も行い、改めて市民に事業を PR する機会になりました。

埼玉県杉戸町

事業開始を多くの写真とともにウェブサイトで紹介

町のウェブサイトにブックスタートを開始したことを紹介。写真を多く掲載し、事業内容だけでなく、ゆったりとあたたかな雰囲気の会場の様子も伝えました。

杉戸町ウェブサイトより転載

茨城県土浦市

図書館まつりで市のキャラクターが PR

市のイメージキャラクター「つちまる」が図書館まつりに参加。“永遠の 1 歳 6 か月児”というつちまるにも、ブックスタートの対象者ということで、パックがプレゼントされました。

写真提供：土浦市

鳥取県境港市

事業開始 15 周年を、記念集とイベントでお祝い

▲ブックスタート 15 周年記念集

15 周年を記念し、記念集作成とイベントの開催を企画しました。市民ボランティアの声により、市民との協働事業として始まった境港市のブックスタート。記念事業を通じ、関係者同士が改めて事業への思いを確認し合い、さらに理解者や支援者を増やす機会になりました。

「ブックスタート 15 周年記念集」を発刊

これまでのあゆみや、ブックスタートから広がったフォローアップ事業、関係者の声を一冊にまとめ、関係団体や市内各所に届けました。
また、ボランティアが市長を訪問して記念集を贈呈し、活動について懇談しました。
※ 記念集は市ウェブサイトで閲覧できます。

日本海新聞
2016 年 3 月 9 日掲載

▲記念イベントが新聞に掲載
マスコミにプレスリリースを送付。当日の様子は新聞に掲載され、市内外に取り組みを紹介できました。

記念イベントを開催

「絵本で笑顔がひろがるまちに」をテーマに、絵本作家の黒井健さんによる講演会と、関係者による報告会を開催。
報告会ではボランティアと境港市が、それぞれの立場からこれまでのあゆみを発表。さらに、12 年前にブックスタートを受けた小学 6 年生の男の子と保護者から、当時の思い出や、家庭で兄弟が絵本を楽しんでいる様子が語られました。
アンケートには「これからも続けてほしい」「絵本を通して、笑顔あふれる市になってほしい」との共感や励ましが寄せられ、活動への新たな活力として関係者で共有しました。

千葉県柏市

対象者 5 万人達成記念式典で PR

ブックスタートの対象者が 5 万人を超えた記念の式典を、多くの子育て支援団体が参加する市主催の子育てイベントの中で開催。担当者からブックスタート事業の概要やこれまでのあゆみを紹介した後、ボランティアが活動を報告しました。さらに、市長からボランティアへ感謝状を贈呈。大勢のボランティアのあたたかい協力とともに行われている事業だということを、広く直接市民に伝えるとともに、連携体制を改めて強くする機会となりました。

写真提供：柏市

▲市長からボランティアへ、感謝状が贈られました。

ボランティアの事業に寄せる思いを書いたカードを会場に展示▶

柏市民新聞　2011 年 11 月 11 日掲載

▲ 2 万人、3 万人の節目でも記念イベントを開催しました。

＼行ってきました！／

埼玉県鴻巣市

子育て NO.1 のまちを目指して

2011 年度から、4 か月児健診でブックスタートを行っている鴻巣市。「子育て No.1 のまち」を目指し、こども未来課が事務局となり事業を実施しています。

かわいらしい看板のかかったブックスタートの部屋で、スタッフが親子を出迎えます。その多くは、市内の子育て支援拠点などでも活動している市民の方々です。市民がこのまちに生まれた赤ちゃんと出会い、言葉をかける。そして、思いを込めて絵本を手渡す。鴻巣市では、親子に絵本のあたたかなひとときを届けることはもちろん、地域の人と人のつながりをつくることも意識しながら事業を進めています。

子育て中のお母さんたちが親子を応援

スタッフとして活動する松本千奈美さんは、3 人のお子さんのお母さん。ご自身の子育ての最中に、仲間とともに NPO を立ち上げ、ブックスタートの他にも、子育てを応援する活動に取り組んでいます。

「絵本をひらくと、赤ちゃんはまっすぐな瞳でこちらを見つめてきます。何でも吸収しようとする、赤ちゃんの独特の純粋さ。どの子も本当に天才です。そんな赤ちゃんに、尊敬の念を持ちながら活動しています」と松本さん。親子に対応する際に最も大切にしているのは、心と心を通わせること。赤ちゃんを一人の人として尊重し、保護者をねぎらう気持ちを持って接することで、言葉にはならない思いも届けたいと考えているそうです。

孤立せずに、楽しく子育てを

市では、子育てをサポートする様々な取り組みを行っていますが、一人で辛い思いを抱えながら子育てしていると、そうした情報にも目がいかなくなりがちです。現在、ブックスタートの事務局を担当する、こども未来課の野口謙二さんは、ケースワーカーとして様々な環境の親子をサポートしてきた経験から、虐待など深刻な状況に陥らないためにも、保護者の「孤立」を防ぐことが重要だと考えています。

「ブックスタートは、読書をすすめるのが目的ではないのですね。親子の愛着形成を支援したり、地域の人と親子が出会い、言葉を交わす場を提供することで、親子の孤立化を防ぐ。そうした様々な要素をもつ事業なのだなと感じています」と野口さんは話してくださいました。

子育てしやすいまちを築くには、様々な施策やサポート体制を整えることはもちろん、そこに暮らす人々が心を寄せ合うことも大切な要素のひとつであることを、皆さんのお話から感じました。

【ブックスタート開始年月】2011 年　【年間出生数】約 900 人　【実施機会】4 か月児育児相談　【事務局】こども未来課

ことのは

スタッフが出合った言葉

「子どもが笑うと周りの大人も笑顔になるし、大人が笑うと子どもも笑うんですよね。」

そんな瞬間をつくり出すのに絵本が役立っているのではないかと、あるボランティアさん。各地のブックスタート会場では、赤ちゃん・保護者・スタッフがつながり、そこに“笑顔の連鎖”が生まれています。屈託なく笑い合えるそのあたたかな時間は、目には見えない“何か”を私たちにもたらしてくれているように感じます。

新しい資料が出来ました！

左：ブックスタート・ハンドブック第 7 版
右：ブックスタート・スタッフガイド